

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 14 日現在

機関番号：32689

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2016

課題番号：15K12930

研究課題名(和文) 環境・農業生産・記録管理 文書史料に基づくエジプト環境史の構築

研究課題名(英文) Opening UP the Environmental History of Egypt Based on Documentary Sources&#8212;Natural Environment, Agricultural Production, and Record Management

研究代表者

熊倉 和歌子 (Kumakura, Wakako)

早稲田大学・イスラーム地域研究機構・研究助手

研究者番号：80613570

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：中東・北アフリカ地域を対象とした環境史の研究は、近年、欧米の学界において注目を集め、研究書や論集が年々と発行されている。しかし、それらは個人研究の成果であり、それゆえに、扱われる時代は中世、近代などの時代区分に限定され、長期変動を扱う本格的な研究には至っていない。本研究は、エジプトを対象にして、ギリシア・ローマ時代からオスマン朝期までの環境史に関わる研究状況と史料状況、研究の手法について調査し、通時的な環境史研究の可能性について検討した。その結果、エジプト中南部のファイユーム地方については断続的に文書史料が得られ、通時的な環境史を展開していくことが可能であることが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：Environmental History that focuses on the Middle East and North Africa region has recently attracted many scholars' attention and many books and journals have been published. However, such studies do not deal with long period that crosses existing periodizations such as 'medieval' and 'modern' because most of them are done by individual scholars. So long-term environmental history of the region has been still awaited.

This study, focusing on Egypt, considered the possibility of long-term environmental history by examination of prior studies, sources, methods related to the field. As a result, it revealed that documentary sources are intermittently available in the Fayyum region, middle south of Egypt and they will enable to explore the area's long-term environmental history.

研究分野：中近世エジプト社会経済史・環境史

キーワード：環境史 社会経済史 エジプト 農業 記録管理 環境 ギリシア・ローマ イスラーム

1. 研究開始当初の背景

今日我が国において「環境史」として受容されている学問分野は、1970年代のアメリカで生じた“Environmental history”を端緒とし、一つの学問分野を越えた大きな潮流を作り出している。近年、その対象地域は非ヨーロッパ世界にも拡大しており、中近東地域をも対象とした研究論集なども見られるようになってきた。しかしながら、それらは環境に着目して歴史を論じたものであり、本来環境史の持つ特徴である学際性という点では、発展の余地が多く残されている。今日の世界的動向として、環境史は、幅広い分野にまたがる横断的・学際的な枠組みと理解されているが、実際は、このような様々な分野が一同に会し、それぞれの研究成果を踏まえながら、共同で研究を行っていくのは、どの地域をとっても難しい。概ね、それぞれの専門分野から個別の研究が発信され、各自がそれらをかろうじて共有しているというのが現状である。そこでは、異なる専門分野の研究成果に容易にアクセスできる環境は十分に整備されておらず、かつて行われた議論が繰り返されている事態も見受けられる。そのような状況において、本研究は、多角的な環境史研究を実現するために、いかなる分野の専門家も同じ地平で議論できるよう、研究環境の整備を行う必要があると考えた。

2. 研究の目的

エジプトは古代王朝期から近現代までのそれぞれの時代に文書を中心とする文献史料を有しているが、時代によって史料の言語が異なるために、通時的分析がほとんど行われてこなかった地域である。しかし、ある時代の農業生産や記録管理のあり方、統治体制といった問題を、エジプトの長い歴史的展開の中に位置づけるためには、環境ファクターを分析対象に加え、より長期的なスパンでの変化を見る環境史に取組む必要がある。そこで、本研究は、前4世紀に始まるギリシア・ローマ期から17世紀オスマン朝期までを対象とし、環境変動と農業生産の相互作用を探り、そこに現れる変化が支配や、国家による記録管理のあり方(国家が何を、どこまで把握したか)にどのような影響を与えたかについて考察する。これにより、環境史と社会史の間に関係を築くための基礎を作ることを目指した。

本研究は、このような大きな目標を掲げつつも2年という比較的短い期間を設定したが、それは本研究を基礎研究として位置づけたためである。すなわち、本研究が達成された後は、その成果を踏まえて、より大きな枠組みでの研究プロジェクトに発展させる展望がある。それゆえ、本研究では、対象を前4世紀ギリシア・ローマ期から17世紀オスマン朝期までのエジプトの中南部に位置するファイユーム地方に限定し、(1)当該課題を解決するための方法論の確立と、(2)それに基づ

くデータセットの作成と分析を行うことを目標とした。

3. 研究の方法

本研究は3名の研究代表者および分担者と1名の研究協力者からなる共同研究である。先述の目標のもと、各人は次のような分担で先行研究の整理、研究史上の課題、史料状況の整理、史料の収集を行った。まず、代表者の熊倉は、13世紀から17世紀を担当した。分担者の亀谷は、7世紀から12世紀を担当した。7世紀から8世紀にかけては、文書史料に用いられる言語がギリシア語からアラビア語に切り替わる時期であるため、二つの言語間の対応関係についても分析し、それ以前とそれ以後の時代の文書を適切に繋ぐための考察を行った。同じく分担者の高橋は、前4世紀から後7世紀までのギリシア・ローマ期を担当した。当該時代の校訂史料については、他の時代に関する研究よりもデータベース化が進んでいるため、その構築・利用状況も整理され、本研究においてデータセットを作成するさいの参考となる情報も提供された。他方、研究協力者の小澤は、コンピュータ・プログラミングの観点から、デジタル・ヒューマニティーズの可能性について、最新の動向を踏まえた情報提供と、データセット構築に関するアドバイスをした。

初年度は4回、次年度は2回の研究会を開催し、上記に示した事柄を報告し、ディスカッションを行った。

4. 研究成果

ファイユームというエジプトの一地域を対象として、通時的にその地域の環境を検証した結果、次のような成果が得られた。

(1) 「豊かなファイユーム」論の再検証

これまで研究者たちのあいだでは、ギリシア・ローマ期のファイユームを肥沃な土地であったとみなすのが通説であった。しかし、当該時期を対象とし、文書史料を駆使した昨今のファイユーム研究では、その見方に疑問を投げかけるものが出てきており、ファイユームの地理的位置づけをめぐる意見が二つに分かれている。ファイユームは特殊な地域であるという認識は、イスラム期のファイユームにおいても同様であったが、これもギリシア・ローマ期と同じく叙述史料をベースにした認識であった。文書史料を用いてこの問題を再検証した場合、ファイユームの地理的位置づけが大きく変化する可能性が示された。

(2) 農業生産の変化の検証

(1)の考察を踏まえ、具体的なデータが得られる13世紀と16世紀を対象として、両時代の農業生産を比較検討した。その結果、13世紀にはサトウキビ生産が活発に行われていたが、16世紀にはサトウキビ栽培は衰退し、小麦などの穀物栽培にシフトしていたことが

明らかとなった。また、耕地面積が大幅に縮小していたことも明らかとなり、約 300 年のあいだに同地でおこった農業生産の変化が示された。

(3) ファイユームのなかの差異

さらに、(2)で示された農業生産の変化は、ファイユーム内部の差異をも浮かび上がらせた。サトウキビ栽培に着目したとき、3 世紀後にもサトウキビ栽培が維持されていた地域と、維持されずに穀物栽培にシフトした地域、農業自体が衰退した地域が見られた。このことは、ファイユームのなかでも地理的条件などによって農業生産に違いが出ることを示す。

以上の(1)(2)(3)を踏まえ、ある地域の環境を扱うさいに、その地域の時代的变化とその地域内部にある地理的差異（あるいはそのほかの要因によって生じる差異）を考慮する必要があることが明らかとなった。他方、それらを明らかにするためには、叙述史料と実記録のあいだの比較検討が不可欠であり、とりわけ、本研究が依拠する文書史料を収集し、それらをデータとしてまとめていく作業の重要性が確認された。

2 年間の成果として、上記の考察を 3 本の論文からなる特集（特集名「環境・農業・記録管理—文書史料に基づくエジプト環境史の構築」）としてまとめ、学術雑誌『イスラーム地域研究ジャーナル』に投稿し、掲載された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 8 件)

熊倉和歌子「砂糖から穀物へ：マムルーク朝期のファイユームにみられた栽培作物の転換」『イスラーム地域研究ジャーナル』9, pp. 56–72, 2017. (査読なし)

亀谷学「西暦 7～13 世紀ファイユーム研究のために：文書と環境からのアプローチ」『イスラーム地域研究ジャーナル』9, pp. 45–55, 2017. (査読なし)

高橋亮介「ギリシア・ローマ期ファイユームをいかに捉えるか：環境史研究の動向」『イスラーム地域研究ジャーナル』9, pp. 32–44, 2017. (査読なし)

Wakako Kumakura, “The Early Ottoman Rural Government System and Its Development in Terms of Water Administration.” In *the Mamluk-Ottoman Transition: Continuity and Change in Egypt and Bilad al-Sham in the Sixteenth Century* (V&R Bonn University Press, 2017), pp. 87–114. (査読あり)

熊倉和歌子「マムルーク朝期エジプトの土地関係記録—支配の移行期における記録の継承」『歴史と地理：世界史の研究 246』691, pp. 26–33, 2016. (査読なし・招待)

Wakako Kumakura, “Who Handed over Mamluk Land Registers to the Ottomans? A Study on the Administrators of Land Records in the Late Mamluk Period,” *Mamluk Studies Review* 18, pp. 279–196, 2016. (査読あり)

亀谷学「初期イスラーム時代における政治的コミュニケーションの構造とその変化」『歴史学研究』950, pp. 164–173, 2016. (査読あり)

高橋亮介「ローマ期エジプトのパピルス文書：オクシュリユンコス・パピルス瞥見」『歴史と地理：世界史の研究』244, pp. 25–32, 2015. (査読なし・招待)

〔学会発表〕(計 4 件)

Wakako Kumakura, “Why Buhayra? From Medieval Perspective,” International Workshop “Nile Delta Workshop,” 2017 年 1 月, 上智大学(日本).

Wakako Kumakura, “Egypt as a Laboratory to Build a Sustainable Society, from Mamluk History to the Future,” International Workshop “German-Japanese Workshop on Mamlukology,” 2016 年 11 月, 東洋文庫(日本).

Wakako Kumakura, “Environmental Factors or Anthropogenic Factors? The Nile and the Mamluks in an Era of Environmental Change,” International Workshop “Natural Disasters in Mamluk Egypt and Syria,” 2016 年 10 月, ボン大学(ドイツ).

Wakako Kumakura, “Reconsideration of the Mamluk Iqta’ System on the Basis of an Ottoman Register,” Third Conference of the School of Mamluk Studies, 2016 年 6 月, シカゴ大学(米国).

6. 研究組織

(1) 研究代表者

熊倉 和歌子 (Wakako Kumakura)
早稲田大学・イスラーム地域研究機構・研究助手
研究者番号：80613570

(2) 研究分担者

亀谷 学 (Manabu Kameya)
弘前大学・人文社会科学部・講師

研究者番号： 00586159

(3)連携研究者

高橋 亮介 (Ryosuke Takahashi)

首都大学東京・人文科学研究科・准教授

研究者番号：10708647

(4)研究協力者

小澤 泰生 (Yasuo Ozawa)